

■研究ノート

「気になる子ども」に関する研究動向

—個別支援と参加の観点からの整理—

高木 芳子*

Reviews of Research on Children with Special Needs:
Organize from the perspective of individual support and participation

Yoshiko TAKAGI

キーワード：気になる子ども，個別支援，参加，集団活動

children with special needs, individual support, participation, group activities

1. 問題と目的

「気になる」子どもという言葉が保育者の間でよく使われるようになったのは1990年代からである（本荘，2012）。2000年以降から「気になる子」の研究が急増した背景には発達障害の認知の広まりが関係していると考えられる（赤木，2017）。2005年に発達障害者支援法が施行され，発達障害の早期発見が大切であるとされたことや，特別支援教育への転換や2008年の保育所保育指針の改訂を契機に，障害のある子どもや気になる子どもは特別な配慮を必要とする子どもと意識されるようになっていった（若山，2017；佐藤ら，2013）。

「気になる子」には特定の定義はなく，「何らかの障害があるとは認定されていないが，保育者にとっては保育が難しいと考えられている子ども」（本郷ら，2003），「行動面において衝動的・暴力的，多動・集中困難，固執・切り替え困難，指示待ち・指示の理解困難のような特徴のある子ども」（山本，2011），「おおむね集団を乱し，保育者から見て困った子ども」（島本，2017），「発達に気がかりを感じる子ども」（鯨岡，2017），「集団の貧し

さを受けやすい子ども」（赤木，2017），「集団参加に関して特別なニーズを持つ子」（野村，2018）と，研究者によって定義は様々である。

ただ，保育者が「気になる子ども」と捉える子どもの多くは障害の診断を受けていない（後藤ら，2010）。後藤ら（2007）は，ある政令指定都市の保育所の現状として「発達障害児全体の中での自閉症児の割合の増加」「軽度発達障害児の急増」「児童虐待問題のまん延」「集団参加の難しい健常児の増加」を挙げ，「集団活動から逸脱しがちな子どもは，近年，その増加傾向が著しい」と報告した。また，統合保育対象児の人数と気になる子の人数との間に正の相関の傾向があることや，障害のある子どもの在籍がある保育所・幼稚園ほど，いわゆる「気になる」子どもの在籍傾向も高い実情があることが指摘されている（後藤ら，2010；広瀬ら，2010）。全国的な調査でも回答を寄せた保育所の約9割にいわゆる「気になる子」が在籍し，保育所では「集団での保育」「行事の企画・運営」について難しいと感じていることが報告されている（日本保育協会，2016）。

これまでの障害児保育すなわち統合保育では，一人ひとりの状況に応じて保育者が個別に配慮，支援をするこ

* 愛知県立大学大学院人間発達学研究科博士後期課程在籍

とが主流であった。しかし、「非公式の数字では、様々な意味で『保育困難』とされる子どもの数は、保育園でおよそ4分の1」と言われるまでに増え、さらに母集団の健常児には「社会性発達の遅れ」がみられる（後藤ら、2007）、「2歳児みたいな4歳児」（木下、2018）といった状況では、個別の配慮をすることでかえってクラス全体が落ち着かなくなることやクラス内で孤立してしまうことも考えられる（寺川、2014）。こうした気になる子どもが複数在籍する状況の中で、子どもも保育者も「困り感」（佐藤、2007；木曾、2011）を抱えず過ごすために、保育者はどのような課題意識を持ち実践を行えばよいのだろうか。

幼稚園教育要領・保育所保育指針においては「一人ひとりに応じる」ことと、「集団の教育力を生かす」（文部科学省、2018）こと、「集団における活動を効果あるものにするよう援助すること」（厚生労働省、2018）の両方が保育者に求められている。特に後者の「集団の教育力」は以前から保育者が現場で体感してきたことであり、他児の存在が子どもの意欲や心理的な安心感に影響を与えることが指摘されてきた（例えば、全国保育問題研究協議会、2006）。このような集団の教育力は障害のある子どもに対しても同様であり、障害のある子どもがクラスの仲間とともに生活する中で、障害のある子どもだけでなくクラスの他児の成長を支える経験が生まれることが報告されている（例えば、湯澤ら、2010）。

しかし、しばしば問題になるのは、統合保育では支援の必要な子ども一人ひとりに丁寧に対応することによって、保育者と支援の必要な子どもがクラス集団から浮いてしまうことである（宇田川、2004）。園長らの統合保育に関する認識を調査した石井（2009）によれば、調査に協力した約8割の園長らは、統合保育が子どもに良い影響を与えると回答している一方で、マイナス面があると回答している園長らが約3割いることも報告されている。園長らがマイナス面があると回答した理由は、保育者が支援の必要な子どもに個別対応をすることによって、他児が待たされること、活動が制限されることが考えられるからであった。

これらの背景から、保育者は「個別支援」と「集団（クラス運営）」という、相反することに悩んでいることが推測される。今後の研究課題として、保育者が「個別支援」

と「集団（クラス運営）」の葛藤をどのように統制しているかを明らかにすることや、特別ニーズとインクルーシブ保育の視点および集団づくりと個の育ちの統一の視点から研究する必要性が挙げられている（中山、2015；野村、2018）。

そこで、本稿では2005年以降の「気になる子ども」研究（タイトルまたはキーワードに「気になる」子ども、「気になる子」、「気になる子ども」等を含むもの）を概観し、「個別支援と集団」や「参加」についてどのような知見が蓄積されているかを整理し、今後の保育実践における課題を探っていくことを目的とする。なお、本稿では「気になる子ども」と記述していくが、文献を引用する場合はその文献による表記を使用する。

2. 研究の焦点による動向の分類

2-1. 「気になる」内容や状況を明確にする研究

保育者はどのような子どもを「気になる子ども」と捉えているのだろうか。平澤ら（2005）が項目を選択するアンケートで調査した結果、保育者が「気になる・困っている行動」の上位項目は集団活動に関する問題、ことばに関する問題、動きに関する問題だと判明した。また、平澤らの調査では保育士が対象だったことから、久保山ら（2009）は幼稚園教諭も調査の対象として加えている。久保山らは平澤ら（2005）のような項目選択では、保育者の実感と乖離するとして自由記述を求めた調査を行った。保育上の課題をたずねた結果では行動面、集団、他児との関係、コミュニケーションが上位に挙がっている。

このように方法や対象は異なっているが、2つの調査結果に大きな差異は見られなかった。その他の「気になる子ども」の行動特徴を調査した研究においても、同様の傾向が示されている（池田ら、2007；木村ら、2011）。久保山ら（2009）と同様に、幼稚園教諭と保育士によって「気になる」姿に違いがあるかを調査した守ら（2013）も、「気になる」子どもの姿に違いがないことを明らかにしている。これらの研究で明らかにされたことは、保育者が個別支援とクラス運営・集団活動の展開をどのように両立させたらよいかという点に悩みを抱

えていることである。

保育者が「気になる子ども」をどうして「気にする」のかを調査した研究では、保育者の発達障害への意識の強さから、発達障害の子どもたちと類似している行動をとる子どもを「気になる子ども」と認識するのではないかとの指摘もある（松永，2013；三山，2019）。一方で、保育者がある目的・意図を持った活動を行おうとする際、その目的・意図を持った活動ができない、もしくは活動に参加しない幼児に対して「気になる子」という意識を持つことになるのではないかとの指摘もある（浅井，2016）。

保育者の意識を調査した研究では、経験年数・職種（岡村，2011；杉山ら，2016）、保育者を支える職場環境（小川，2010；守ら，2015）、保育方法や環境（佐藤ら，2009；杉本ら，2017）、気になる子ども自身の変容（木村ら，2012）によって、保育者による「気になる子ども」の認識に差が生まれたり、保育者の認識に変容が見られたりすることが明らかにされている。

さらに、保育者へのアンケート調査や実践研究を踏まえ「気になる子ども」が発達のどの面に弱さを抱え、どのような教育的ニーズを持っているのかを明らかにすることを目的としたチェックリストが作成されている。これらの研究は子どもと関わりのある、保育者・他の専門職・保護者と、子どもの教育的ニーズを共有すること、早期発見して支援につなげることを目的としている（安梅，2009；本郷，2018）。

本郷（2018）によれば、チェックリストは子どもを理解し、支援していくためのアセスメントツールとされるが、一方で玉井（2009）が指摘するように、障害の有無やカテゴリー分けに意味があるのではなく、子どもにとって有効な手だてを見出していく手がかりを得ることが大切であり、チェックリストや診断によって子どもを障害のカテゴリーで捉え、障害の特性を知ることによって子どもを理解したと考える傾向があることが危惧されている。

2-2. 子どもを理解する視点に着目する研究

先に見たように、集団活動場面で悩みを抱える保育者が多い。保育者の側から見たこのような状況を、子どもの側から捉えて、集団活動から子どもが逸脱すること

は、他児とのかかわりを学習する機会や、共同的な遊びを通して他児との仲間関係を構築する機会を、「気になる子ども」が失うことであるとする見方がある（飯島，2008）。また、保育者の想定する子ども像と合わない子どもを「気になる子ども」と問題視することを危惧し、行動の要因に発達の弱さや身体的な問題、不安定な情緒などが隠れている可能性を念頭において、子どもの内面を読み取る必要性も指摘されている（山本，2011；鯨岡，2017）。

子どもの行動の要因をアセスメントし、問題となっている状況の改善を試みるため具体的な支援を検討する研究は、臨床心理士などが保育者にカンファレンスを行う形で進められている。保育者は外部の専門家から新しい視点を得て、実践の中に新たな気づきを反映させている。これらの研究では外部の専門家のアセスメントを受けることで、保育者が主体的に実践の見直しを試みる様子が見られる（牧野，2011；木村ら，2012；阿部，2013）。

しかし、こうした実践を見直す視点にも偏りがあるのではないかということが指摘されている。「気になる子ども」には集団場面から逸脱する子ども、コミュニケーションに難しさのある子どもといった否定的な意味合いが付随しており、研究では保育者が困難さを感じる面を取り上げることが多く、子どものよいところを意識する視点が少ないという指摘である。この点を疑問視した研究では、保育者が子どもの良い面、気にならない点を意識することによって、子ども理解の新しい視点を持つことにつながることで、それによって新しい保育実践が展開することが述べられている（赤木，2013；五十嵐，2017）。研究によってアセスメントの方法や方向性は違うものの、保育者が子ども理解の新しい視点を得ることが、保育の見直しや新たな保育実践への展開に向けては大切であると言える。

2-3. 保育内容・方法に着目する研究

保育者が実践でどのような支援をしているのかを調査した研究もある。運動会に着目した佐藤らの一連の研究（佐藤ら，2006；高倉ら，2007；広瀬ら，2010）では、「気になる」子どもが見通しを持ちパニックなどを起こさないで、運動会の練習に取り組んだり、運動会の当日を過

ごせたりするように、保育者が子どもの様子に合わせた配慮や支援を行っていることを報告している。

守(2017)は、保育のしづらさを感じている保育者は、保育観を振り返ることで活動のあり方を見直すことができると述べている。また、保育内容や方法については、子ども自身が活動を自己選択・自己決定することや、活動時間・内容に幅を持たせること、意図的に関わりを作り出すようなグループ活動、異年齢集団での活動を取り入れていくことも提案されている(山本, 2011)。

保育者に向けて、保育を見直す視点を与える実践事例集や支援に関する文献では、はじめに保育者が悩みを抱える子どもの姿を紹介し、子どもの姿の背後にある子どもの思いや要求などを複数挙げている(赤木ら, 2013: 七木田ら, 2017: 本郷, 2018: 中川, 2020)。同時に、支援の方法だけでなく、「気になる子ども」にとって他児が存在する意義や、保育者の支援とは違う友達の影響などを紹介している。これらの文献には、個別支援が集団生活・集団活動と対立するものではないことを示している点が共通している。

保育現場を観察した佐藤ら(2009)の研究では、個別支援が集団生活・集団活動と対立するものではないことが報告されている。佐藤らは、朝の支度が習慣化しにくい幼児を観察、アセスメントし、保育者とカンファレンスを行っている。出席ノートにシールを貼る空間の混雑が、対象の幼児の集中を途切れさせる要因かもしれないと気づいた保育者は、シールを貼る机を増やし空間を広げた。すると、観察対象の幼児は朝の支度途中で集中が途切れることが少なくなっていった。この環境構成の変化は、対象の幼児だけでなく、結果的に他の幼児にとっても生活しやすい環境を生み出したと考察されている。佐藤ら(2009)の事例は、集団参加の難しい健常児の増加や、支援対象児以外にも社会性発達の遅れが多く見られる現状では(後藤ら, 2007: 木下, 2018)、気になる子どもへの支援はその子どものためだけではなく、他児にとっても生活しやすいクラス環境となるであろうことを示している。

先に挙げた実践事例集(赤木ら, 2013: 七木田ら, 2017: 本郷, 2018: 中川, 2020)などでは「落ち着きがない」「集団活動から離脱または不参加」「対人関係のトラブルで他児をたたたく等する」「コミュニケーションが

とれない」といった子どもの姿が取り上げられている。こうした姿は他者がいるからこそ現れ、問題視されるとも言える。その一方で、幼稚園・保育所で行われている集団保育には、家庭や個別の療育保育とは違い「子どもが集まることによって生まれる教育力」がある(岡村, 2013)。

幼稚園教育要領では「集団の教育力」が、保育所保育指針では「集団における活動」の効果が保育者に対して求められている。集団保育は家庭や個別の療育保育とは違う経験ができる場であり、その経験から学ぶことがあると考えるからこそ、「集団活動に参加しない」「どうすれば参加させられるか」といったことが保育者は「気になり」、保育の中での課題と認識されるのではないだろうか。

実際に、実践事例集で取り上げられる事例や、アンケート調査の回答には、「参加できるようになる」ための支援について保育者が悩んでいると思われる記述が多い。こうした記述に関して赤木(2013)は、「参加させる」と「参加する」の主語が誰なのかを、保育者が意識することは重要であると述べている。

3. 個別支援と参加の観点による整理

3-1. 集団保育と「気になる子ども」

ここまで先行研究を、「気になる」内容や状況の明確化を目指したもの、子どもを理解する視点を提示するもの、保育内容・方法に言及したものと、内容によって分類し概観してきた。先行研究に共通して言えることは「気になる子ども」とは集団保育の場で保育者が気になる姿を見せる子どもであるということである。そして保育者は、「気になる子ども」への個別支援と集団活動やクラス運営をバランスよく行うことに難しさを感じている(杉本ら, 2017)。

保育者は支援が必要な子どもに対して、個別に丁寧なかかわりを行う必要性を認識するとともに、集団保育で経験する集団生活で、仲間と一緒にいる楽しさを味わってほしいとも願っている(全国保育問題研究会, 2001)。個への働きかけ、集団への働きかけは、働きか

ける方向がそれぞれ独立し、違っているように感じられることが、保育者に「個別支援と集団活動やクラス運営をバランスよく行わなければ」という葛藤を生じさせると考える。

そこで、葛藤を引き起こすと考えられる2つの要因を取りあげて考察していきたい。まず、個への働きかけの基となる「個別の指導・支援計画」の作成についてである。その作成は、保育者の意識にどのような影響を及ぼし、クラスの活動とどのように関連してくるのか。次に、どのような状況を「気になる子ども」が集団活動に参加していると捉えるのか。この2つの視点で考察していくこととする。

3-2. 個別の支援と保育者の意識

2007年の特別支援教育の実施に伴い「個別の教育支援計画」作成が求められるようになった。この計画は、他機関との連携はもとより、支援の必要な子どもを乳幼児期から学校卒業まで、長期的な視点で支援していくことを目的としている。そして、2008年に改訂された幼稚園教育要領・保育所保育指針では「個別の指導・支援計画」作成が求められることとなった。こちらは長期的支援を見通したうえで、現在の教育的ニーズを把握すること、また、教育的ニーズを他の職員と共有し、連携して支援にあたることを目的としている。また作成においては、クラス等の指導計画と関連づけることが大切と述べられている（厚生労働省、2008）。「個別の指導・支援計画」作成によって、それまで臨床心理士や医師による見立てを基に行っていた支援から、その時々の子どもの成長を保育者自らがアセスメントし、その教育的ニーズを見出ししていくことへ転向することとなった（尾崎ら、2013）。

しかし、その作成にあたっての目標は、保育者が考えるその子どもにとっての課題となる傾向があると指摘されている（吉川、2014）。個別の支援・指導計画の作成は定期的に行われ、作成の度に保育者は気になることを課題として上げ、「気になる子ども」の気になる点を強く認識する可能性がある。赤木（2017）が述べるように子どもの得意な面を見つけ、それを個別の指導・支援計画に反映させることを、保育者は意識する必要がある

と考える。さらに、小川（2011）によって、集団の場で活用可能となるように、クラスの指導計画と個別の指導・支援計画が関連づけられる必要性を説いているのは、保育現場において両者が関連づけて作成されているとは言いがたい現状にあることを推測させる。

また、既存のチェックリストによって、保育者が子どもの教育的ニーズの読み取りのためにアセスメントする視点を持つようになったことで、「気になる子ども」を発達障害と結びつけて考える傾向も強まった。さらに、保育者が子どもを理解する新たな視点を得ることによって、弊害を生み出す可能性があるという指摘する意見もある。例えば、発達障害の特性を知ることによって、その子どもを理解したように受け止めてしまうことである。「集団が途切れやすい子どもには視覚支援が有効」など、特性を知ることによって支援がパターン化してしまい、子どもの行動の理由を心情や状態を慮って理解しようとする視点を失うことである（玉井、2009；加藤、2017）。また、水内（2008）は「ADHDの傾向があるから、じっと座ってられないのは仕方がない」というように、子どもの育ちに対して期待度を下げってしまう危険性について述べている。

こうした保育者の考え方、すなわち保育観や子ども観は、保育行為となって現れる（上田、2014）。それは保育者が企画した活動に「参加させる」という、子どもをコントロールしようとする意識を、保育者が無意識につくる可能性をはらんでいる（赤木、2013）。つまり、浜谷（2009）が言うように、「特定の子どもは多くの子どもたちと同様な生活を強制される（同化）」、「特定の子どもの活動は多くの子どもから関心を持たれない（放置）」状況が生まれる可能性があるということである。

個別支援計画および個別の指導・支援計画作成には、子どもが一貫した支援が受けられるようになるという良い面がある。ただし、保育者が子どもの気になる点をアセスメントし、課題を意識する状況は、保育者から見て「気になる」課題を達成しようとする方向へ、保育者の支援が向かいやすくなるという可能性について留意する必要がある。また、現状ではその関連が弱いと考えられる個別の指導・支援計画とクラス等の指導計画であるが、個別の指導・支援計画とクラス等の指導計画との結び付きを考えることが、「気になる子ども」が集団に参加す

るとはどのような状況かを考えていくことにつながると考える。

3-3. 参加を規定する要因の試論的整理

「気になる子ども」が集団に参加するとはどのような状況を指すのかを考えるにあたって、どのような状況を保育者が「気になる」と捉えるのか整理したい。

保育者が気になるとして挙げている姿に「コミュニケーション」「集団活動」「他児との関係」「行動面」などが挙げられている（平澤ら，2005：久保山ら，2009）。これらはクラスの他児が存在しなければ現れない姿である。また、気になる姿は自由遊びや戸外遊びでは生じにくく、一斉活動（製作，給食，午睡など）や戸外からの入室で生じやすいことが報告されている（木村ら，2012）。このように、「気になる子ども」に関する研究には集団との関係性が根底にある。次に、集団との関係性において、参加がどのように述べられているか整理していく。

小向ら（2017）によれば、目的のひとつに社会参加の促進を挙げているリハビリテーションの分野では、国際生活機能分類（ICF）の「参加」を社会参加の広義として捉えている。しかし、社会参加の定義は対象者の疾病や年代によって様々であることから、対象者の社会参加を定義し、その定義に合わせた評価指標を選択する必要があると述べている。この指摘は保育においても参考になると考える。子どもの集団活動への参加の定義は、一人ひとりの状態（発達，情動，体調など）によって変わってくると推測されるからである。

さらに刑部（1998）は、保育者から「ちょっと気になる子」と認識されていた子どもが、集団へ参加する過程を「正統的周辺参加」論の枠組みで分析し、参加の姿が共同体との関係性によって違っていることを報告している。また浜谷（2009）は、子どもの意見表明権が平等に尊重されているかどうか、参加を考えるうえで重要だと述べている。これらは、参加を定義するものは一人ひとりの状態だけではなく、共同体，すなわち集団との関係性が関わっていることを示唆している。つまり，3-2. で述べたように、一人ひとりの状態（発達，情動，体調など）に対する個別の支援だけでなく、共同体すなわち

クラスとの関係性も参加に影響すると考えられる。

「気になる子ども」に関する保育者の言葉として「参加させる」「参加できない」という表現が使われている（阿部，2013；藤井，2012；中川，2020）。上述した赤木（2013）が指摘したように、「参加させる」には、子どもをコントロールしようとする保育者の意識が潜在している可能性がある。「参加できない」には「子ども自身の個体能力や特性の問題に還元している」（本郷ら，2003）のような意味合いが感じられる。集団活動とは保育者の期待に沿うよう参加させられるものではなく、本来は子どもが「友達と一緒に楽しみたい」と思い加わるものだと考える（藤崎ら，2010）。

佐藤らによる一連の研究（佐藤ら，2006：高倉ら，2007：広瀬ら，2010）では、運動会への支援条件の検討を目的として、参加への支援についての回答を保育者に求めている。気になる子どもの興味関心に寄り添い、子どもの好きなことを活動に取り入れるといった支援よりも、トラブルやパニックが起らないようにすることを配慮や支援と考えていることが、保育者の回答からは読み取れる。この調査回答を見る限り、保育者は活動参加について、子どもに参加の意向、どのように活動へかわりたいたかの確認を行うことを、活動参加への支援や配慮として認識していないことがうかがえる。

「気になる子ども」が集団活動へどのようにかわりたいたか等の確認を行うには、子どもとの意思疎通が必要となってくる。しかし、「気になる子ども」はことばやコミュニケーションに課題を持つ子どもが多いことも報告されている（平澤ら，2005：久保ら，2009）。幼稚園教育要領・保育所保育指針で、「子どもは、自分の気持ちを自分の声や表情，身体の動きそのもので表現することも多い」と述べられているように、子どもの感情や気持ち，要求は言葉で伝えられるとは限らない（文部科学省，2018：厚生労働省，2018）。

また、障害児保育の事例ではあるが、ある自閉症児が他児の楽しそうな様子に心惹かれたり、自分の好きな身体運動を伴う時には自ら活動へ参加したりすることも報告されている（宝田，2018）。活動への参加を問うとき、保育者はその活動が「気になる子ども」の自発的活動，すなわち心動く活動であるのかを振り返り評価する必要があるのではないだろうか。その際、声や表情，身体の

動きといった表現を本人の意欲や意向と捉え、個別の指導・支援計画や活動への参加に反映させていく視点が必要と考える。

子ども自身が環境に働きかけ、自分をつくりかえていくプロセスが発達である。自分をつくりかえていく原動力となるものが心動かされる体験であり、その体験を通して、子どもは新たな力や感じ方を手に入れると言われている（赤木，2013；木下，2018）。そして、幼稚園教育要領では一人ひとりが「主体性を発揮して活動を展開」していくように教師が援助することが繰り返し述べられ、保育所保育指針でも「子どもが自ら環境に関わり、自発的に活動」するような配慮が求められている。上述したことから、活動への参加はするものであり、「参加させる」ものではないと言える。

「集団と個」の関係について諸岡（2006）は「個と集団は相互に影響し合っているものであり、決して対立的・敵対的關係にない」と述べている。そして岡村（2013）は、安心して遊ぶことができる大人との関係を基盤に、子どもが個のあそびから、自分の周囲の環境に関心を持ち、働きかけるようになる中でクラスへの所属意識が育まれ、友達と一緒に楽しい、一緒にいたいという気持ちが強まって集団に参加し、集団をつくっていくプロセスを4期に分けて示した。岡村はプロセスを提示したうえで、どのようにこのプロセスをたどるかには個人差があることも付け加えている（岡村，2013）。

上述したことを踏まえて「気になる子ども」が集団に参加するとはどのような状況かをまとめてみたい。まず、「気になる子ども」にとって安心できる自分の居場所が集団であり、その集団に所属していると子どもが感じられること。そして、その集団の中で、主体性を発揮しながら、自ら環境に関わろうとすること。その過程で得られるものは、大人とは違う子ども同士の関係性、子ども同士の衝突や葛藤から得られる学びである。発達が能動的活動であり、集団の発達と個の発達が互いに影響し合うのならば、幼児期の集団保育において参加を規定する要因は、環境に働きかける中で生じる葛藤や衝突に対して、所属するそれぞれの子どもの意見が尊重される関係性を構築していく過程にあると考える。

4. 今後の課題

保育者が「気になる子ども」の集団活動への参加について難しさを感じていることは多くの研究で触れられていた。参加のプロセスについて述べられているものはあったが（岡村，2013）、①どのような状態を保育者が「参加」と捉えているのかは曖昧である。また、②活動に「参加する／しない」を子どもの意思表示とする視点について掘り下げる必要性を感じる。活動は子どもの主体的な行動の表れであるという原点に立ち返った検討が必要と考える。

上述した①、②を検討していくにあたっては、「気になる子ども」は「集団参加に関して特別なニーズを持つ子」（野村，2018）と、考えていく必要があるのではないだろうか。「集団参加に関して特別なニーズを持つ子」（野村，2018）が、集団活動に参加していく過程において、どのような変容が保育者の意識や、「気になる子ども」、クラスの他児に起こったか、また、その契機について丁寧に取り出された実践記録は多い。実践記録の中に蓄積されている知見と、研究による知見を結びつけていくことで、活動に参加するとはどういうことかを考える視点が得られるのではないかと考える。

引用文献

- 阿部美穂子 2013 保育士が主体となって取り組む問題解決志向性コンサルテーションが気になる子どもの保育効力感にもたらす効果の検討 保育学研究 51 (3) pp. 93-106
- 赤木和重 2013 発達の視点から「気になる子」を理解する赤木和重 岡村由紀子編「気になる子」と言わない保育 ひとなる書房 pp. 102-125
- 赤木和重 2017 気になる子の理解と保育 ―創造の保育に向けて 発達 149 ミネルヴァ書房 pp. 18-23
- 安梅勅江編 2009 気になる子どもの早期発見・早期支援「かわり指標」を活用した根拠に基づく子育て・子育て支援に向けて 日本小児医事出版社
- 浅井広 2016 保育者は「気になる子」に対する第一印象をどう受け止めるべきか 松山東雲短期大学 46 pp. 19-28
- 藤井貴子 2012 保育で気になる子どもたち かがわ出版
- 藤崎春代・木原久美子 2010「気になる」子どもの保育ミネルヴァ書房
- 後藤秀爾・大見幸子 2007 就学前高機能自閉症児への発達支援 愛知淑徳大学論集コミュニケーション学部・コミュニケーション研究科篇第7号 pp. 49-66

- 後藤秀爾・村田佳葉子・大森麻美 2010 統合保育における「気になる子」をめぐる実態調査愛知淑徳大学論集コミュニケーション学部・心理学研究科第10号 pp. 1-16
- 刑部育子 1998 「ちょっと気になる子ども」の集団への参加過程に関する関係論的分析 発達心理学研究 9 (1) pp. 1-11
- 浜谷直人 2009 困難をかかえた子どもが保育へ参加する浜谷直人編発達障害児・気になる子の巡回相談ミネルヴァ書房 pp. 15-48
- 平澤紀子・藤原義博・山根正夫 2005 保育所・園における「気になる・困っている行動」を示す子どもに関する調査研究発達障害研究 26 (4) pp. 256-267
- 広瀬由紀・佐藤慎二・高倉誠一・植草一世・中坪晃一 2010 保育所・幼稚園における「障害のある」子どもおよび「気になる」子どもの活動参加に関する調査研究 (3) 植草学園短期大学紀要 11 pp. 23-27
- 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉嘉子・飯島典子 2003 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査研究 発達障害研究 25 (1) pp. 50-61
- 本郷一夫編 2018 「気になる」子どもの社会性発達の理解と支援チェックリストを活用した保育の支援計画の立案 北大路書房
- 本莊明子 2012 「気になる」子どもをめぐる研究動向 愛知教育大学幼児教育研究 (16) pp. 67-75
- 五十嵐元子 2017 「気になる子」に関する肯定的な場面のアセスメント 帝京短期大学紀要 No. 19 pp. 43-52
- 飯島典子 2008 「気になる」子どもの遊びの成立を促す保育者の働きかけ東北大学院教育学研究科研究年報 57 (1) pp. 327-338
- 池田友美・郷間英世・川崎友絵・山崎千裕・武藤葉子・尾川端季・牛尾禮子・永井利三郎 2007 保育所園における気になる子どもの特徴と保育上の問題点に関する研究 小児保健研究 66 (6) pp. 815-820
- 石井正子 2009 幼稚園・保育所の園長等管理職の統合保育に関する認識 学苑・初等教育学科紀要 824 pp. 62-78
- 加藤弘美 2017 保育園・幼稚園における気になる子ども・気になるおとなの理解と支援 生涯発達研究第 10号 pp. 71-77
- 木村明子・松本秀彦 2011 保育者が「気になる子」の発達と行動特性 作大論集1 pp. 209-225
- 木村明子・松本秀彦 2012 保育園における「気になる子」への支援事例研究 作大論集2 pp. 261-279
- 木下孝司 2018 「気になる子」が変わるとき かもがわ出版
- 木曾陽子 2011 「気になる子ども」の保護者との関係における保育士の困り感の変容プロセス保育学研究 49 (2) pp. 200-211
- 小向佳奈子・藤本修平・杉田翔・光武誠吾・輪違弘樹・小林資英 2017 リハビリテーション分野における社会参加の定義と評価指標 理学療法科学 32 (5) pp. 683-693
- 厚生労働省 2008 保育所保育指針解説書 フレーベル館
- 厚生労働省 2018 保育所保育指針解説書 フレーベル館
- 久保山茂樹・齊藤由美子・西牧謙吾・當島茂登・藤井茂樹・滝川国芳 2009 「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査 国立特別支援教育総合研究所研究紀要 36 pp. 55-76
- 鯨岡峻 2017 「気になる子」から「配慮の必要な子」へ 発達 149 ミネルヴァ書房 pp. 2-6
- 牧野桂一 2011 保育現場における発達につまずきのある子どもの評価と支援 筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報 22 pp. 249-266
- 松永あけみ 2013 「気になる」子どもへの保育者の対応と周囲の子どもたちへの影響に関する保育者の意識調査 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 62 pp. 139-145
- 三山岳 2019 発達が気になる子について乳児期の保育者が認識する心理的プロセスの分析 早期発達支援研究 3 pp. 5-16
- 水内豊和 2008 幼稚園における特別支援教育の体制づくりに関する実践研究人間発達科学部紀要 3 (1) pp. 93-102
- 文部科学省 2018 幼稚園教育要領解説 フレーベル館
- 文部科学 2008 特別支援教育の推進に関する調査研究協力者会議 (第6回) 配付資料 資料1 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/054/shiryo/attach/1366403.htm#top (2021年1月16日閲覧)
- 守巧・山崎慎史・駒井美智子 2013 保育現場における「気になる」姿への傾向分析 東京福祉大学大学院紀要4 (1) pp. 63-71
- 守巧・山崎慎史 2015 保育者はいかにして気になる子と関係を築いていくのか東京家政大学研究紀要1 人文社会科学 55 pp. 141-149
- 守巧 2017 気になる子がいるクラスを多面的に捉える 発達 149 ミネルヴァ書房 pp. 29-34
- 諸岡康哉 2006 集団づくりの本質とは何か 全国保育問題研究協議会編 人と生きる力を育てる 新読書社
- 中川信子 2020 保育園・幼稚園のちょっと気になる子 ぶどう社
- 中山智哉 2015 保育現場における「気になる」子どもに関する研究動向と展望九州女子大学紀要 52 (1) pp. 1-16
- 七木田敦・山根正夫 2017 発達が気になる子どもの行動が変わる保育者のためのABI実践事例集 福村出版
- 日本保育協会 2016 社会福祉法人日本保育協会 保育所における障害児やいわゆる「気になる子」等の受け入れ実態, 障害児保育等のその支援の内容, 居宅訪問型保育の利用実態に関する調査研究報告書
- 野村朋 2018 「気になる子」の保育研究の歴史的変遷と今日的課題 保育学研究 56 (3) pp. 70-80
- 小川英彦 2011 保育所保育指針・幼稚園教育要領と気になる幼児の保育論 小川英彦・広瀬信雄・新井英靖・高橋浩平・湯浅恭正・吉田茂孝編 黎明書房
- 小川圭子 2010 「気になる子ども」の保育方法についての一考察 幼年教育研究 22 pp. 29-34
- 岡村裕子 2011 保育者から見た「気になる子ども」についての調査研究 滋賀大学大学院教育学研究科論集 (14) pp. 37-48
- 岡村由紀子 2013 みんなで育ち合う楽しい保育の作り方赤木和重岡村由紀子編 「気になる子」と言わない保育 ひとなる書房
- 尾崎康子・小林真・水内豊和・阿部美穂子 2013 保育者による

- 幼児用発達障害チェックリスト (CHEDY) の有用性に関する検討 特殊教育学研究 51 (4) pp. 335-345
- 佐藤慎二・高倉誠一・広瀬由紀・植草一世・中坪晃一 2006 保育所・幼稚園における「障害」のある子どもおよび、いわゆる「気になる」子どもの活動参加に関する調査研究 (1) 植草学園短期大学紀要 6, 7 pp. 1-9
- 佐藤暁 2007 自閉症児の困り感に寄り添う支援 学習研究社
- 佐藤智恵・七木田敦 2009 保育室の環境構成が幼児の活動に与える影響 幼年教育研究年報 31 pp. 97-101
- 佐藤智恵・七木田敦 2013 保育所・幼稚園における障害児・気になる子の保育支援に関する研究の変遷広島大学大学院教育学研究科紀要第三部 62号 pp. 171-178
- 島本一男 2017 気になる子の理解と保育 ―創造の保育に向けて 発達149 ミネルヴァ書房 pp. 7-12
- 杉本翔平・石田淳也・松延毅・中村知嗣・藤田清澄・本田由衣・香曾我部琢 2017 “気になる子” への援助とクラス全体への援助―保育者による援助の配分―宮城教育大学情報処理センター研究紀要 24 pp. 45-52
- 杉山成史・松尾剛・杉村智子 2016 熟達保育者による「気になる子ども」の認識と支援プロセス福岡教育大学紀要 65 (4) pp. 51-59
- 高倉誠一・佐藤慎二・広瀬由紀・植草一世・中坪晃一 2007 保育所・幼稚園における「障害」のある子どもおよび、「気になる」子どもの活動参加に関する調査研究 (2) 植草学園短期大学紀要 8 pp. 23-34
- 玉井邦夫 2009 発達障害の子どもたちと保育現場の集団づくりかもがわ出版
- 宝田紗希子 2018 統合保育において自閉症児が活動にかかわる過程 子ども学研究紀要 第6号 pp. 47-56
- 寺川志奈子 2014 障害のある子どもが仲間とともに育ち合う保育実践の検討 障害者問題研究 42 (3) pp. 170-177
- 上田敏丈 2014 保育者の保育行為スタイルと集団活動場面におけるかかわりに関する研究 教育学研究ジャーナル 15 pp. 1-9
- 宇田川久美子 2004 「自閉症児の心の世界」への参入と統合保育における共生の可能性 保育学研究 42 (1) pp. 59-70
- 若山飛鳥 2017 「気になる」子ども研究の展開1982年から2016年まで 武庫川女子大学大学院 教育学研究論集 (12) pp. 57-62
- 山本理絵 2011 気になる幼児の発達を促す保育方法論気になる幼児の保育と遊び・生活づくり 小川英彦ら編 黎明書房
- 吉川和幸 2014 私立幼稚園に在籍する特別な支援を要する幼児の個別の指導計画に記述される「目標」に関する研究 北海道大学大学院教育学研究院紀要 120 pp. 23-43
- 全国保育問題研究協議会編 2001 障害乳幼児の発達と仲間づくり 新読書社
- 全国保育問題研究協議会編 2006 人と生きる力を育てる 新読書社